

「シンボリック・アーケオロジー」 の射程：1980年代の考古学の行方

後 藤 明

I. はじめに

第二次大戦後まもなく、キダー (Kidder) ら時の米国考古学界の権威に対し、真向から論争を挑んだのは、弱冠 35 歳のウォルター・テイラー (Walter Taylor) であった。彼の主著 “A Study of Archaeology” (1948) に示された理論は、後に米国考古学を席卷する「ニュー・アーケオロジー」の諸理論を予見したものであるともいわれている。しかしテイラー自身は優れた「理論家」ではあっても「フィールド・ワーカー」でなかったためか、あるいは時期尚早のためか、おそらくは両者の理由により、彼の理論の「実践」にはなお十五年の歳月が必要であった (Thomas 1979: 19—61)。

さて、1962年にもう一人の「考古学の若き怒れる男」、ルイス・ビンフォード (Lewis Binford) が後の米国考古学界に大きな影響を及ぼした論文 “Archaeology as anthropology” を発表し、ニュー・アーケオロジーの口火を切った。彼は文化の全体性・多元性を自然環境と社会環境の両面における適応的コンテクストで捉えることを強調し、人類学としての考古学の意味を論じた (Binford 1962)。以後彼の理論に影響をうけた論文が欧米考古学会に続々現われてくるが、とくに1970年代の前半、英国のコリン・レンフリュー (Colin Renfrew) の編集した論文集の中で、考古学者は、生態学やシステム論の導入により、過去の文化・社会の構成とその変化に対し、(社会)人類学同様の議論ができるようになったと主張した (Renfrew 1973)。

しかしこのようなニュー・アーケオロジスト達の(社会)人類学や社会科学への熱い思い入れに対し、英国の社会人類学者エドムンド・リーチ (Edmund Leach) は、上記論文集の中の “Concluding address” と題する総括論文の中で、彼らに対し「戒め」を行った。そこで彼の議論をいくつか抜き出してみよう。

①ビンフォードの「行動は、文化のレパートリーと環境との相互関係の産物」という考え方は、彼ら考古学者にとっては “new” であっても、社会人類学においては1930年代にマリノフスキー (Malinowsky) がすでにのべているところである。

②社会人類学は、マリノフスキーらの「機能主義」から、レヴィ=ストロース (Lévi-Strauss) らの「構造主義」などに paradigm shift を行っているが、考古学はこの変化に追いついていない。

③「社会組織」については、社会人類学者は実際に観察・分析することができるけれど、考古学者は断片的資料、あるいは社会のアウト・プットしか手にすることができない。従って考古学者にとってそれは、結局「ブラック・ボックス」でしかありえない (Leach 1973)。

少なくとも1970年代の状況を斟酌し、五十歩譲ってリーチの戒めの①・②を認め、更に百歩譲って③を受け入れるにしても、近来、(社会)人類学側自体にも根本的反省が起ってきたようだし、1980年代初頭の今日、考古学の中には今一つの新しい動きが出てきている。それは英国のイアン・ホッダー (Ian Hodder) らの提唱する Symbolic and Structural Archaeology である¹⁾。本稿の以下の部分では、この「シンボリック・アーケオロジー」の「理論」と「実践」を検討し、ここ二十年間米国を中心とする「ニュー・アーケオロジー」の理論的基盤であった「機能主義」・「文化生態学 (Cultural Ecology)」および「文化唯物論 (Cultural Materialism)」との対比を考えてみたい¹⁾。

Ⅱ. 「ニュー・アーケオロジー」の理論的背景と「シンボリック・アーケオロジー」の提唱

まず初めに、ここ二十年間、米国を中心とするニュー・アーケオロジーを支えてきた諸理論について述べねばならない。

デイヴィッド・トマス (David Thomas) は彼の書いた考古学の入門書の中で、考古学と人類学諸分野との関連を論じた (1979: 95—135)。

まず彼はキーンシングの論文 (Keesing 1974) 等を基に人類学における諸理論を ideational approach と adaptive approach の二つに大別した。そして前者を「アイデア・シンボル・精神構造などが人間の行動を形づくるとみる方法」、後者を「技術・生態学 (的状況)・人口・経済などが人間の行動を形づくるとみる方法」と定義した。さらに彼は前者に含まれる Cognitive Anthropology, Structural Anthropology, Symbolic Anthropology などが考古学に寄与することができるかという自問に対し、“not very” などと消極的見解を示した。一方後者に含まれる「文化唯物論」・「生態人類学」・「文化進化論」に関しては、積極的見解を示し、とりわけ文化唯物論に至っては、米国学考古学者のおよそ半数は文化唯物論者であるとまで言っている。

ところで適応的 (adaptive)・唯物論的 (materialistic) あるいは行動学的 (behavioral) アプローチが考古学者の思考の基軸をなしてきたのはまぎれもない事実である。それは一つには考古学者の手にできる資料の性質に原因がある。つまり考古学において、技術・経済・生業・古環境の復元がかなりの発達をとげていることは疑いえない。それと対照的に直接復元の困難な社会や宗教については考古学者が比較的消極的であったのも事実であろう (Trigger 1971)。考古学における「物質的基盤」解明の方法の発展は、レズリー・ホワイト (Leslie White) の「一般進化論」やジュリアン・スチュワード (Julian Steward) の「文化生態学・多系進化理論」と相まって、ここ二十年の考古学理論を方向づけてきた (Kohl 1981)。

さて、ホワイトやシュワードの諸理論もとりいれながら、マーヴィン・ハリス (Marvin Harris) は、より包括的な理論である「文化唯物論」を唱える (1968: 1980)。彼は文化を下部構造・構造・上部構造に階層化させ、技術・生態・経済・人口からなる下部構造が構造 (主に社会組織) と上部構造 (宗教芸術等) を確率的に決定する (probabilistically determine) と考えた (1980: 55—56)。また彼は、生産関係を下部構造よりはずし、下部構造により、基本的要因のみ留めることによって、文化唯物論がマルクス主義理論とも異なることを強調している。彼の理論の特徴の一つは、一見不合理にみえる儀礼にも実は「有用」な意味のあることを解明しようとする点にある。たとえばメキシコのアステカ族の人肉を食べる儀式は、植物食に依存する彼らに、生命維持に必須の動物性たん白質を補給する機能があるとか、アマゾンのヤノマモ・インディアンによくみられる戦闘は、人口増加を調節する機能があるといったように考えるわけである (Harris 1977)。要するに文化は究極的に下部構造によって決定されているとするのである。

ハリス理論の提唱と前後して、米国学術界は、文化唯物論こそが、考古学を支える統一理論であるという見解も出てきているようであるし、Cultural Materialism という術語が、賛同であれ反対であれ、考古学の論文中に散見されるようになってきた。(たとえば次を見られたい。American Antiquity, 41-1: M. Chibnik 論文; 同47-4: B. J. Price 論文。)

「文化唯物論」的思考方式が、米国のみならず、ヨーロッパ、そして日本の考古学者の論理に大きく影響してきたことは否めない事実であり、しばしば考古学者自身が意識しないほど“常識”化した思考になっている。「環境に調和 (適応) して生業活動を行っていた」とか、「自然条件を考慮して遺跡立地がなされている」とかいう発言の背後には、共通して文化唯物論的思考が存在しているように思われる (Kohl 1981)。

また近年さかんにいわれる「生態学的方法」も広義の文化唯物論的方法に含めてもよいように思われる。なおここでいう生態学的方法とは、自然遺物分析による古環境の復元といった「技法」的な意味ではなく、たとえば元来生物学の分野の進化生態学で使われてきた「適応」という概念が、文化の変異を説明する概念として有効かどうか、修正の必要はあるのかといった「方法論」を意味している。

さてニュー・アーケオロジーの旗頭になってきたのはいうまでもなくビンフォードであって、彼は最近エスキモーの調査に赴き精力的な研究を続けてきた。特に彼のエスノ・アーケオロジーの業績には説得力に富むものが少なくないが、ホッダーら「シンボリック・アーケオロジスト」の批判の槍玉にあがっているのは実はこのビンフォードなのである。そこでつぎに少し最近のビンフォードの研究を支えている理論的基盤について考えておかねばならない。

彼は、文化系統や mental template に基礎をおき、文化を同質に捉えようとする“normative view”に対する批判からニュー・アーケオロジーを出発させた。さらに彼は、ヨーロッパの旧石器時代に属するムステリアンのアセンブリッジにみられる構成差を文化系統の差ではなく、機能的観点から適応形態の一側面であるとした。しかし方言などを考えれば解るとおり、文化の地方差のよ

うなものは確かに存在するし、ビンフォードの依存した石器分類体系が必ずしも機能を反映しているという保障はないことから、フランソワ・ボルド (François Borde) らの厳しい批判をうけた。そこで彼は適応形態の差、あるいは一集団内での適応戦略 (adaptive strategy) の差が、確かに質的に異なるアセンリッジを残すことを示すために、エスキモーの調査を開始した。とくに動物遺存体の研究は彼の興味を端的に示している。というのは、動物遺存体には一つの理想型が現われるからである。つまり動物の各部位の分類—肋骨とか骨盤とかいう骨の分類—には一般的指標があるし、たとえば肋骨と骨盤の形態差は、エスキモーが彼らの mental template から造り出したものではない。そして各部分骨とそれに伴う肉に関し、エスキモーは肉量とか保存の可能性とかで評価している。これは動物の各部分には、“機能”的差が存在し、それにそってエスキモーは消費、保存、運搬・分配などに関する decision-making を、季節や一回の獲物の頭数に応じて行なうということである。したがって一領域内に残された、いくつかの動物遺存にみられる差—種類の動物の各部位の差—は季節などにそった適応戦略の差を反映している。このような仮定のもとに彼は文化の変異 (動物の骨も人間によって残されたならば、文化の産物である) は適応方式 (adaptive expedience) の結果である、という理論を証明しようとした (Binford 1978)。

最近の彼の一連の研究・論文では、エスキモーやブッシュマンなど苛酷な環境に生きる人間を“極限型”としてとりあげ、たとえばエスキモー例とブッシュマン例を両極とするスペクトルの中に、他の多くの文化があてはまる、一種の法則性を追求しているようである (Binford 1979; 1980; 1982)。

以上のべてきた、適応的アプローチ・行動学的アプローチ、あるいは文化生態学・文化唯物論の諸理論は、すべてではないにしろ米国を中心とするニュー・アーケオロジーの根底にあったといつて大過ない。ホッダーらの提唱するシンボリック・アーケオロジーは、ニュー・アーケオロジーの根本にあるこれらの理論に対する批判から始まる。

ホッダーは、彼の編集した Symbolic and Structural Archaeology (1982a) という論文集の冒頭の論文 “Theoretical archaeology: a reactionary view” で次のような諸点からニュー・アーケオロジーを批判した。

- ①文化の変異を有目的目的 (utilitarian purpose)—とくに生存—だけで説明するのは誤りである²⁾。
- ②機能的観点は文化の変異とユニークさを正しく説明できない。
- ③社会組織の存続を重視するあまり、個人の役割が無視されている。
- ④ニュー・アーケオロジストがよく行う通文化的 (cross-cultural) 比較のみでは、個々の文化のコンテクストを無視しているから個々の文化の社会的、文化的動態を正しく把握されない。
- ⑤さまざまなレベルの仮説、たとえば高位理論、中位理論、低位理論が、個々独立の意味をもつかのように唱えられているが、これらは一貫した一つの社会・文化理論の中で統合されねばならない (前掲書: 3—6)。

このような批判の下に彼は自己の理論を展開していく。以下彼の論旨にそってみていこう。

機能主義的考古学（ニュー・アーケオロジー一般とみていいだろう）では構造、とくに社会構造を道具と同様に社会・自然環境への適応のパターンとみるが、構造（structure）は表面的なパターンスタイルをうみだすところのコードないし規則と理解すべきである。このコードないし規則は、生存とか適応戦略を追求するに際しても従うべきものである。社会内でのコミュニケーションや世界観などは共通の“言語”や規則をセットにして使用する結果なのである。

物質文化はコードによって構成されたシンボルなのであり、シンボルを構成する方法には二つある。すなわちシンボルを一つのセットに組織する方法 syntagmatic と、個々のシンボルの意味を同列のシンボルとの対比で定める方法 paradigmatic の二つである。要するにメロディーとハーモニーの違いにたとえられる（Leach 1976）。物質文化は構造化された相違のセットとして把握され³⁾、観察されたパターンは根底にあるコードに言及して理解されねばならない。さらに今までは遺物が現実の社会構造の反映、あるいは社会構造内の要素—男性／女性，階級差—のシンボルとはみられても、シンボル自体の意味、なぜそのシンボルが選択されたかは説明できていない。それは個々の文化的コンテクストとその歴史の中ではじめて明らかにされる。

シンボルは情報の流れ（information flow）を最大化させるために構成されているのであり、シンボルの間に representation の相対的な程度の違いはない。具体的には、我々の関心は、物質文化が社会関係の観念的（ideological）な表出であって直接の反映ではないということにある。シンボルとその構造的原理は社会的行為を形造るために使われ、その過程で再現、再解釈され変質していく（1982b）。

以上がホッダー理論の骨子である。次章で彼らが具体的に何をやっているかをみるが、その前に蛇足ながら筆者の見解をつけ加えたい。

まず我々人間が弱い葦でありながら、こうして生き永らえているのはまさに文化のお蔭であり、文化が人間の生存・適応に欠かせないものであることは疑いえない。しかし生存・適応だけでは「すべて」を説明できないのも事実である。たとえば筆者が今朝ウインド・ブレーカーを着てきたのには寒いからと風邪をひかないためという「適応的」意味があるが、それではなぜ青いのを着てきたかという説明にはなっていない。この例からもわかるように、文化には機能・適応だけではわりきれない「なにか」がある。ニュー・アーケオロジストも「スタイル」等の問題を無視していたわけではない。たとえばダネル（Dunnell 1978）は、物質文化の変異には二者、つまり機能的変異とスタイル的変異があるとする。そして前者は文化の進化に関わり、「淘汰」のメカニズム下で変化していくが、後者は進化や適応と無関係で確率過程的（stochastic）に変化していく、とした。しかし一般的にいつてスタイル的変異を機能的変異ほど熱心に追求してきたわけではない。もちろんホッダーのいつているところはスタイル自体の追求ではなく、その根底に潜む構造を追求すべきであるということである。

また考古学者は特定の儀礼用具とか葬制のような物質文化は、他のものたとえば日用品などより何かをシンボライズする程度が大きいと考えがちだが、ホッダーによればそれはちがう、というこ

とだろう。「ある社会状況下である物質文化は……」という条件つきなら正しいが、一般化はできぬということであると思われる。

ホッダーの理論は明らかにレヴィ＝ストロースの構造主義理論の影響をうけているが、考古学の宿命的問題つまり“構造の変化”を追求する姿勢を持っている。

ホッダーらの追求しようとするものは、考古学者が今まで消極的だった側面の研究、たとえばスタイルとか宗教とかをつけ加えるといった“加算的”な意味には把えるべきでなかろう。成功するかどうかは別として、一つの paradigm shift を意図しているように思われる。

次章では上記論文集から具体的研究を二、三抜き出し検討してみたい。

Ⅲ. 各論：シンボリック・アーケオロジー

<葬 制>

さきにビンフォードは集めた民族例などから、社会的地位の機能差とシンボライズされた社会的な位置の間には高い異種同型構造 (isomorphism) があるとし、葬制の差異は社会内での人の地位の変異を直接反映すると考えた。この理論をもとに、葬制によって社会階層化を追求する研究が少なからず行なわれた (e.g. King 1978)。

しかしホッダー編集の上記論文集の中で、マイケル・ピアソン (Michael Pearson) はビクトリア朝時代の英国の葬制を研究し次のような結論を示した。①葬制などは現実の社会関係を必ずしも直接反映はしない。②葬制にかかわるイデオロギーはしばしば現実社会の不平等、階級差を mystify ないし正当化 (naturalize) する。③そのわけは、死者は生前と違った役割を死と共に与えられるからである。④古くはゴードン・チャイルドが指摘しているように社会関係の変化、再編の動きが激しいときに、はっきりした葬制の差が出てくるようである (1982)。

要するにここで大事なことは、現実の社会関係と葬制の間にはイデオロギーが介在するし、現世の「構造」と来世の「構造」とは必ずしも一致しない、換言すれば「俗」の論理で「聖」の論理はわりきれないということである。

またマイケル・シャンクス (Michael Shanks) とクリストファー・ティリィ (Christopher Tilley) は、人間の体には body symbolism があるとの見地から、欧州石器時代の墓における人骨各部位の構成法を分析した。そして上腕骨等の左右のアンバランスな骨と左右の区別のない頭骨や椎骨のような骨が、左右の区別のある骨から離しておかれる事実から、いくつかの構造的原理を抽出した。これらの現象に関し確定的解釈は行っていないが、体のシンボリズム、たとえば神聖な上半身と不浄な下半身の区別が集団の区別の隠喩 metaphor になるという例をいくつかあげ、その解釈の可能性を考えている。そして一般論として、文化的動物である人間の体には本質的に文化と自然の矛盾が潜み、死んで骨になることによって自然に変換されていく各部位を人工的に構成して文化の側に戻す、という原理を提唱した (1982) (図1)。

<セツルメントと食物残滓>

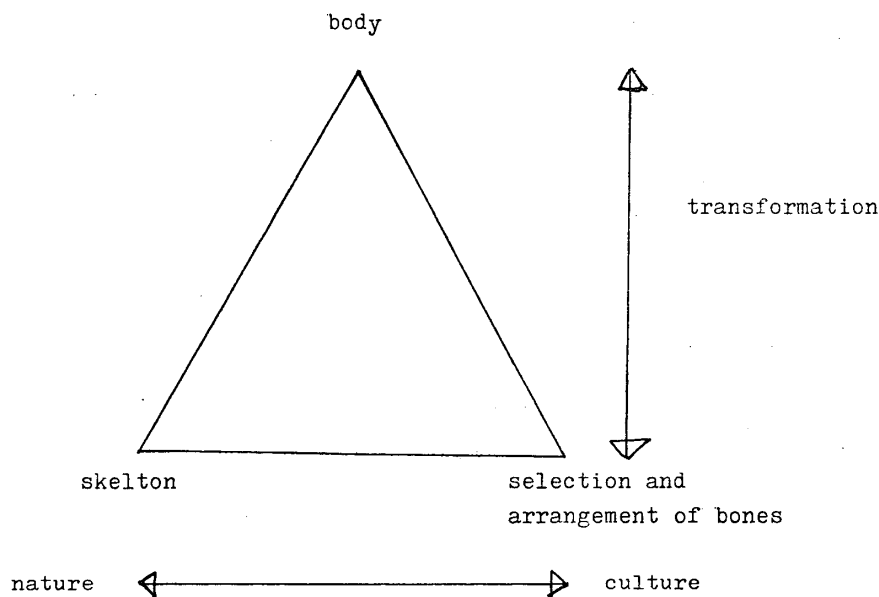


図1
The somatic triangle (after Shanks and Tilley:Fig.11)

ムーア (Moore) はケニアにおける現生民族の観察から、食物残渣は単なるゴミ捨ての結果ではなく、その社会のイデオロギーに関連した構造をもちうることを主張した。ケニアのマラクウェット (Marakwet) 族は家族を社会単位とするが、一家族が住居を定めるとき男小屋と女小屋を区別して対置させる。彼らは、灰は女小屋の後方に、家から出るゴミは男小屋の脇に、そして山羊の糞は男小屋の脇に捨て、これらのゴミを混在させない (1982)。

この指摘は今まで主として生業や経済との関連でしかとりあげられなかった貝塚研究に別の角度から光をあて、「貝塚は先史時代の生業の直接の反映」という考えに再考をうながすものである。

<遺物研究>

いくつかの研究例があるが、ホッダーのオランダ新石器研究の例をみてみよう。彼は土器の文様構造を対照とか対置といった原理から分析した。そしてある時期の文様構成に対置現象が激しくなるのは、当時起ってきた社会矛盾を正当化しようとする関心からだと言主張する。彼は同様の構造変化を石斧の装飾、葬制やセツルメントにもみようとする (1982c)。

Ⅳ. 考 察

正直に言って筆者はホッダーらの主張に期待と当惑の両方を感じる。彼らのいうところを広く解釈すれば期待につながる。つまり遺物の形態でも貝塚の形成でもシンボリックな要因が介在してくる、というのは必ずしも新しい指摘ではないが、彼らが今後この線にそって歴史・民族資料を多く集め、考古学資料の新しい解釈を試みてほしいと思う。筆者も彼らの指摘と相前後して以下のことに新たな興味が出てきた。そこで若干私見をのべてみたい。

筆者は一貫して海洋適応、あるいは漁撈研究に興味をいだいてきた(後藤 1979)。主として興味
の中心がアラスカや日本の漁具の技術的機能的な研究(後藤 1981, 1982)から、魚骨のデータ蒐集
も含め遺跡の立地状況と遺跡間変異との関連の追求に移ってきて、最近では日本の縄文(後藤 1983)
やハワイ島(Goto 1983 a)での研究を行っている。この意味で筆者の研究はさきあげた機能的
・適応的アプローチの線上にあったわけで、とくに最近まとめた縄文文化の研究では、カーチ
(Kirch 1980)やジョーナム(Jochim 1982)らの「生態学的方法論」にのっとり、東北地方を中
心に漁具・貝塚からセツルメントパターン、そして交易、集団間関係等の社会的側面の三つの側面
間の関係、各側面に係る適応戦略の結果による環境への安定した適応を追求した(Goto n. d.)。と
くに漁具分析では上記カーチの理論をうけ、変異が適応力(adaptability)をうみだす源泉である
から、タイポロジーは norm や“平均値”のみでなく、変異と淘汰プロセスの解明などを論文の
中心にすえた。要するに適応理論を推し進めてみたわけである。一方縄文晩期に発達する、筆者が
large/massive タイプと称する回転式離頭銛は“改良形”という見方もあるが、筆者はむしろ装飾
要素を強調し、この時期、所謂亀ヶ岡文化内で銛漁が何らかのシンボリックな意味をもつようにな
ってきたと考えた(Goto n. d.)。さらに筆者はホッダーらの研究の刺激もあって、現在準備中の
ポリネシアの銛に関する論文では、材料の有無と製作技術の存否という技術上の問題および銛漁に
適した漁撈対象がいるかないかといった生態的問題という二つの次元に加え、シンボリズムとい
う第三の次元を強調する予定である(Goto 1983 b)。ニュージーランドを除いたポリネシア各地に
おいて釣針は発達したが銛はあまり発達しなかった。その理由は技術的および生態学的次元で説明
できる。ハワイやイースターでは技術がマルケサス・ソニエテの中央ポリネシアから伝わらないか、
もし伝わったとしても製作に適する大型獣の骨等の材料があまりない、あるいはもともと銛という
ものはこの地域で漁具として効率的でないという理由が銛の未発見を説明できるよう思われる。し
かしなぜ中央ポリネシアのマルケサスで先史時代に現れた銛が(Sinoto 1979)、歴史時代まで保持
されたかという点(Rollin 1929)、それは民族誌が示すように、銛漁は専業漁師の他に首長の子息な
ども行う一種の威信を示す活動であるとして、第三の次元で、より説明できるように思われる。確
かにエスキモーにとっての銛漁も何らかのシンボリックな意味をもっていたようであるが、彼らの
銛漁が第一・第二の次元で明らかに適応的であるために、第三の次元に係わる要因のみを抽出する
ことは困難である。それゆえマルケサスの銛は興味深い例を提供するものである。

さらに今後太平洋地域の資料を中心に行なう予定の動物遺存体の分析では、最小個体数の推定な
どの他に、ビンフォードが行なっている動物の各部位の比率の差の問題をビンフォードの観点、つ
まり適応方式とさきに紹介したティレイの観点、ここでは人体ではなく動物の体のシンボリズムを
総合していく努力をしたい。

このようにホッダーらのいうところを広く解釈すれば、道具(Hill 1977: 図2参照)、セツルメ
ントパターン(Miller 1980)、生業(Bowdle 1980)などへのタブー等のシンボリックな要因の介
在をとりあつかった研究、さらにロック・アートの構造から精神構造や宇宙観を探る試み(Jones

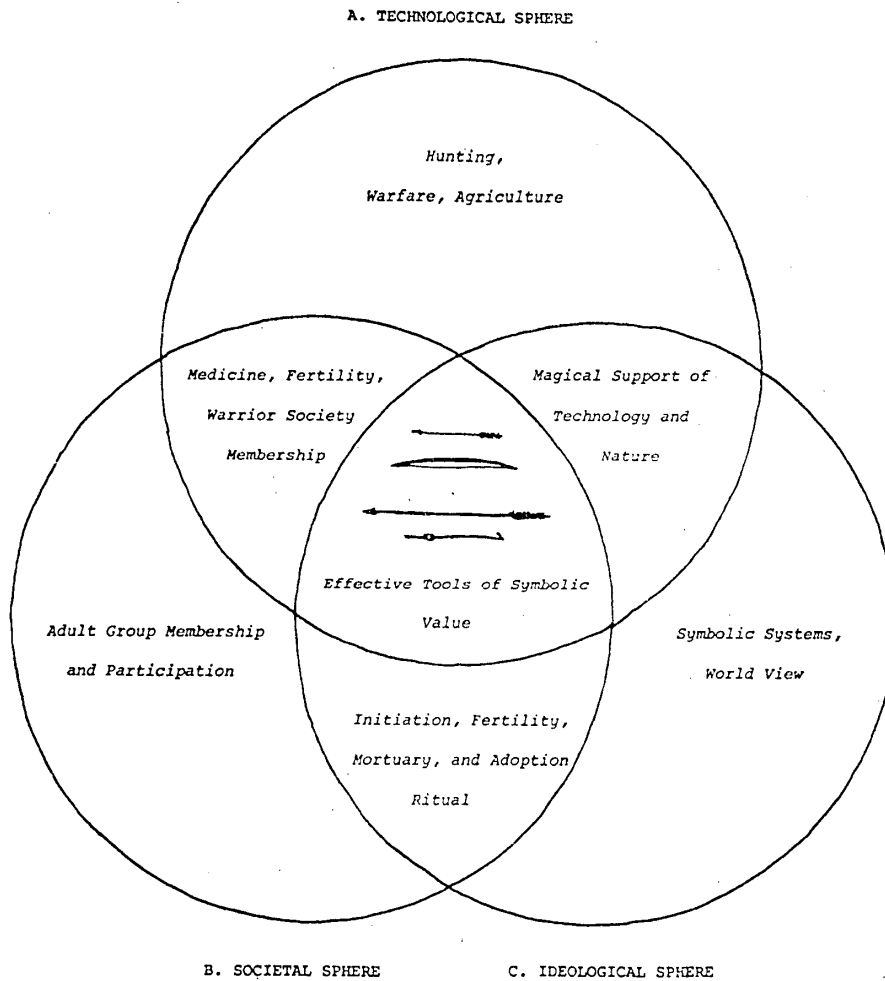


図2
Multiple associations of weapons (after Hill:Fig.4)

1967)なども少なからずあった。

ところでわが縄文文化の研究にもホッダーらの主張と類似した研究がいくつかあるようである。葬制研究では林謙作氏が中期末以降の東日本の葬制にみられる分割・統合原理を指摘し、それが当時の縄文社会にあった双分制 dual system の code を示していると述べている(林 1977:1980)。また水野正好氏の「与助尾根集落論」(水野1968)の中で示された集落分割原理は丹羽佑一氏(1978)によって発展を遂げ、さらに丹羽氏は最近、集落の分割構造から具体的に縄文時代の社会構造まで論を進められている(1982)。また谷井彪氏(1979)は勝坂式土器を中心に分析され、文様の変換構造に縄文人の世界観の一端を見出そうとされている。筆者もこれらの研究に興味を持っているので、今後の展望に関し若干私見をのべておきたい。まず林氏や丹羽氏のいう葬制や集落の分割原理は、「墓域」や「中央広場」といった自然から隔離された、いわば「文化の場」が成立することと表裏一体にあるように思われる。この文化の場の成立には定住化といった、究極的には文化の物質

的基盤に係わる問題がある。また二次植生（西田1982）といった自然の文化化とも関連があろう。さて場を区切って分割するという二段構造の以前に、まず集落（集団）を分割するという構造がありはしないだろうか。青森県の長七谷地貝塚に伴う早期末の集落は、明確な中央広場はもたないが、集落を二分する原理の萌芽がみられる（市川他 1980）。

さてさきにのべた谷井氏の研究に戻ると、氏は土器の文様を構成する原理として、さまざまなレベルをあげておられる。また丹羽氏は集落址の分類と空間分割を考えておられる。これら土器の文様構造と集落の分割構造を分析する共通の原理がないわけではない。二章で syntagmatic と paradigmatic の区別をあげたが、たとえば土器の単位文間の変換関係あるいは同列の単位文間のセットとしての関係は paradigmatic であり、単位文が文様帯、あるいは土器全体の中にどのように配置されるかは syntagmatic の問題である。同様に同列の諸集落址間の相違は paradigmatic の問題であり、個々の集落址が一集落内にどのように配置されるかは syntagmatic の問題である。また頭位や顔の向きで分類された各墓址間の関係は paradigmatic であり、各墓址あるいは埋葬人骨が墓域内にどう配置されるかは syntagmatic の問題である。このように土器の文様構造・集落および墓制の分割原理は、「空間構成法 (space syntax)」の元で統合可能であるかもしれない (Hiller et al 1976など)。

次に林・丹羽・谷井氏らとホッダーらの考え方の違いについてのべよう。縄文研究者の諸氏は、縄文人の社会関係とその矛盾、宇宙観、あるいはより抽象的な「分割原理」と縄文時代の物質文化の諸側面との間には直接的関係があり、後者は前者を反映しているとの仮定をもっておられるようである。ところがホッダーらの強調するところは、物質文化に「構造」が明確化してくるのは、現実社会に矛盾が起ってきたとき、たとえば新たな社会階層化と伝統的な平等な社会組織や信仰との矛盾にみられる現象であるということである。つまり彼らの追求する「構造」なるものは必ずしも、現実社会の異種同型的 (isomorphic) な反映でなく、むしろ現実の不平等を非現実のレベルで正当化するという、いわば現実の社会矛盾をしばしば misrepresent あるいは mystify するものである。ホッダーらは、物質文化にみられる構造、一社会のもつイデオロギー、そして社会関係とその矛盾との間に、より複雑な動的関係を仮定しているようである。そして社会矛盾は物質的土台に起因するものであり、構造をうみ出すところのイデオロギーも究極的には土台に決定されるにしても一度形成されたイデオロギーは逆に土台つまり生産関係等に社会的束縛として力を及ぼすこともある。ホッダーらはこの点においてマルクス主義のイデオロギー論を導入してくるのである。

次にホッダーらの研究は今後数多くの批判をうけるにちがいないということを述べよう。まず彼らが理論のよりどころの一つとしているレヴィ＝ストロースの構造主義理論である。詳述はさけるが人類学自体の中でも構造主義に対しては種々の批判がある。レヴィ＝ストロースのいう構造なるものは、主観的・恣意的で証明困難であり、悪くすると自己達成的予言であるとの批判さえある (Thomas 1979 : 117)。何らかの一定の方法で物質文化諸相間に共通の「構造」が描出しえても、それが他人の空似でないとか何をもって証明しうるか。またさらに物質文化諸相に misrepresent さ

れた社会関係の矛盾をどうやって追求すればいいのかという疑問も起きてくる。

またもう一方の理論的基盤であるマルクス主義に関しても批判をうけよう。ホッダーらは主に資本主義社会の解明を目的としたマルクスの理論そのものでなく、ゴドリエ (Godelier) のネオ・マルクイズムやフリードマン (Friedman) の構造主義的マルクス主義 (Structural-Marxism) 理論を基礎にしているようである。これらマルクス主義的観点 (Marxist Perspectives) の陣営と米国の文化生態学・文化唯物論の陣営とでは、同じ文化現象、たとえば北西インディアンのポトラッチでも解釈がちがう。主として前者は宗教・儀礼が社会矛盾を隠すものとして捉え (Godelier 1975)、後者はそれらには社会の結合を高めたり人口を調節したりする機能があると、「適応的」に捉えるわけである。筆者がさきにホッダーらの主張を、「単に復元困難な宗教などの復元を可能にするというように“加算的”に捉えるべきでない」と述べた理由はここにある。それは復元された宗教に対する解釈が違うからである。さらに生態学理論の方からも「構造主義的生態学」(Alland 1975) なるものを唱える研究者が出ていることも事態を複雑にしている。

さらに一つ根本的な問題がある。それは時間の問題である。基本的に共時的、あるいは非時間的 (atemporal) な構造主義理論を考古学にどのようにして結びつけるのか。構造はどの程度の時間幅でおさえればいいのか。ある程度編年的区分ができれば可能との見方もあろう。しかし具体的にどの程度の時間的尺度を持てばいいのか。これは今までにもあった問題である。考古学者は今まで「バンド」とか「部族」とかいった概念を使ってきたが、「バンド」や「部族」は民族学の中で共通の機能や空間的範囲と同様にその時間幅・通時的機能がどれほど厳密に定義されてきたであろうか。故ディヴィッド・クラーク (David Clarke) はこの考古学者の“無垢”を“loss of innocence”と副題した論文中で次のように皮肉をこめて批判している。「フランス・ムステリアンの3万年以上にもわたる伝統を、5つの型式的な部族の序列で解釈するのは、ベトナム戦争を電子の交換で説明しようとするに等しい曲芸なのである」(1973: 10)。もちろんこれは考古学者の責任である。

加えてビンフォードは考古学的時間のもつ本質について重要な発言を行っている (Binford 1981)。彼は、「考古学者が追求するのは、過去の文化が過去のある時点で止まった結果残された残存である」という考えをポンペイ的前提 (Pompeii premise) として厳しく批判する。というのは彼によると、考古学者が扱う資料には本質的に個々の事象の蓄積の上に得られた、我々の日常認識とは違った種類ないし違った次元のリアリティー (different order of reality) があるからである。筆者も基本的に彼に同意し、この考えを発展させてみると、考古学の扱う文化ないしビンフォードの cultural system は他の人文・社会科学 (人類学・社会学・地理学、そして場合によっては歴史学も含む) の扱う文化と本質的にリアリティーを異にしているということになる。考古学者が長期間にわたって観察することによって短期間の観察によるのとは異なった文化—場合によっては本来の文化の姿—が現れてくるのではないか、ということになる。長期間の観察により短期間の観察で目を奪われがちな“ノイズ”が相殺される。この点にこそ考古学の独自の学問としてのプライオリティーがあるのであるまいか。もしそうなら、時間的に文化を細分していくに際し、とくに無目的に行なわ

れた場合、細分することによって得るものと同時に失うものもある、あるいは細分することによって見えてくるものと同時に見えなくなってしまうものもある、ということになる。したがって安易に非時間的なレヴィストロースの構造主義理論を考古学に導入することは、大きい問題がある、ということにもなる。レヴィストロースが短期間の観察で「予見」した構造なるものは、本来的に考古学者のように長期間観察して初めて現われる種類のものであると逆手にとって考えれば話は別であるが。

筆者が今感じていることは、欧州新石器文化や日本の縄文文化のように編年が確立し、細分もかなり進んでくると、他の人文・社会科学の扱う時間のオーダーに接近していくことになる。しかしその場合、他の分野の理論の進入を防ぐほど考古学は「理論武装」していないのが現状である。良し悪しは別にして、ホッダーらの「シンボリック・アーケオロジー」理論は端的にそれを示している。

V. あとがき

1980年代に至って、冒頭にあげたリーチの「戒め」はあたらなくなってきたようである。というのは(社会)人類学で今なおホットな論争の続く「文化唯物論」、「構造主義」、「マルクス主義的観点」等の諸理論を考古学者自身が議論の対象としはじめたからである。また生態人類学でも、今までの短期間の文化観察に対する根本的疑問が起ってきたようである(Orlove 1980)。目の前の文化を人類学者が完璧に理解できるわけではない。長期間観察ができる考古学は、古今東西すべての文化を対象にできるわけで、この意味においてそれなりの長所をもっている。

ホッダーらの「シンボリック・アーケオロジー」が考古学に新分野を開くか、あるいは考古学をますます混乱させるかは、彼らの「理論」と「実践」のフィード・バックに期待せねばならない。ホッダーらの動きもうけて、80年・90年代の考古学は一層複雑な様相を呈してくるのは間違いあるまい。その中で個々の考古学者は自分の「立場」を明確に表明していかななくてはならないであろう。

以上述べてきた筆者の説明に至らない点や、あるいは筆者の誤解に基づくところもあるかもしれない。興味ある方はぜひ自分で文献にあたってください。なお本稿でも若干ふれた、西欧における「マルクス主義的考古学」に興味がある方は、ハワイ大学 Dr. M. Spriggs 編 “Marxist Perspectives in Archaeology” (Cambridge Univ. Press) が近々刊行予定なので読まれたい。⁴⁾

(Dec. 19. 1982. Univ. of Hawaii at Manoa, Honolulu)

<追記>

脱稿後、新たに論文を読んで考えた点を若干つけ加えたい。

①最近の American Antiquity (1982) 誌に発表されたマーク・レオーネ (Mark Leone) の論文 “Some opinions about recovering mind” は本稿でのべたテーマと関係が深いので言及したい。これは今まで機能主義や生態学的理論が中心であった「ニュー・アーケオロジー」の本流からやや

外れた、ジェームズ・ディーツ (James Deetz) らの業績 (たとえば 1977) をホッダーらの最近の主張に関係づけた論文である。前に述べたようにホッダーらの理論は、マルクス主義のイデオロギー論と関係が深いのだが、レオーネの論文も示している通り、あくまでも彼らの理論は最近の欧米考古学界全体にみられる、「シンボリック・パースペクティブ」の中の一つの立場と理解すべきであろう。

ホッダーらによる、考古学における「機能主義」批判は、確かに傾聴に値すると思うし、レオーネがいうように、機能とはまた別に、すべての遺物ないし物質文化を (たとえば“宗教的遺物”のみを扱うのではなく) 同等な重要性をもって扱う、というようにこの批判を発展させるのもまた可能であろう。つまり遺物遺構、ないし物質文化は全体として、あるいはそれらすべての間の位置関係によって何ものか——たとえば人間の精神構造——を象徴化していると考えられるわけである。この点に於てはレオーネ論文に登場するほとんどの考古学者が同意するものと思う。

さて議論がわかれるのはこの先からである。物質文化の構成から復元された象徴的体系やその源泉となるイデオロギーを、適応の手段と把えるか、現実の社会矛盾を隠すものと把えるか、あるいはあくまで物質的基盤の付帯現象と把えるか、それとも究極的には物質的基盤に規定されるが、一定期間物質的基盤に力を及ぼすものとするか、立場によってさまざまに分かれてくると予想される。したがってホッダーやレオーネの主張は、個々の考古学者の立場の、根本的再考を促しているように思われる。

②適応理論を唱える米国のニュー・アーケオロジストも、本稿や追記①でのべた傾向に対し、反応はさまざまであるようだ。

まずビンフォードの立場は、人間の精神構造や文化伝統のようなものとは別途に、あくまでも人間の「適応行動」を追求していこうというものであるように思われる (1978: 11)。

一方生態学的観点から業績を残してきたカーチは、考古学における適応理論に関する理論的論文の最後の部分“prospect”において、今後唯物論的 (materialistic) ないし生態学的アプローチと、構造主義的ないしシンボリックアプローチを統合せねばならないと論じた (1980: 147)。これを実践するかのように、最近の彼の業績には文化の基本的制限要因としての生態学的要因に加え、魚のタブーの問題 (Kirch & Yen 1982) のようなシンボリックな要因に積極的に取り組む姿勢がうかがえる。

彼は基本的に、「まず生態学的枠組の中で考古学的資料の変異の説明を試み、説明できない部分をシンボリックな要因により説明を試みる」といった柔軟な方法論を持っているようだ (氏との個人的ディスカッションによる)。

<結論>

本論および追記で考えてきた問題は、考古学者がより包括的な枠組を模索し始めた現われであると理解できよう。そしてこの問題は、「考古学によって何を知りうるのか」といった認識論にもつ

ながっていくであろう。「生業」や「社会」等、さまざまな側面の研究において、考古学がここ十数年洗練してきた「生態学的アプローチ」（たとえば Butzer 1982）と最近提唱されている「シンボリック・アプローチ」を統合していかねばならないであろう。

注

- 1) ホッダーらの提唱する考古学を一体何と訳して何と表現していいか迷った。直訳して象徴（主義的）考古学・構造（主義的）考古学といえるほど定着した分野でもない。本稿の後で述べるように、彼らのいうところを広く解釈する意味で「シンボリック・アーケオロジー」とすることにした。なおこれは、クリフォード・ギアツ（Clifford Geertz）らのシンボリック・アンソロポロジーを特に意識しているのではない。
- 2) ホッダーのビンフォード批判は特にこの点にある。
- 3) シンボルはそれ自体に意味があるのではなく、他のシンボルと対比され、他のシンボルと相違しているから意味がある。シンボルの意味は構造の中で配置されて初めて決まるものである。以上のような考えを示している。
- 4) 西欧における最近のマルクス主義的考古学や人類学と、日本考古学における「唯物史観」や「共同体論」との比較に関しては、稿を改めて論じてみたい。

References

Abbreviations

A. A.: *American Antiquity*

A. R. A.: *Annual Review of Anthropology*

Alland, A. Jr.

1975 Adaptation. A. R. A. 4: 59-75.

Binford, Lewis, R.

1962 Archaeology as anthropology. A. A. 28: 217-225.

1978 *Nunamiut Ethnoarchaeology*. New York: Academic Press.

1979 Organization and formation process: looking at curated technologies. *Journal of Anthropological Research* 35: 255-273.

1980 Willow smoke and dogs' tails: hunter-gather settlement systems and archaeological site formation. A. A. 45: 1-17.

1981 Behavioral archaeology and the "Pompeii Premise". *Journal of Anthropological Research* 37: 195-207.

1982 The archaeology of place. *Journal of Anthropological Archaeology* 1: 5-31.

Bowdler, Sandra

1980 Fish and culture: a Tasmanian polemic. *Mankind* 12: 334-340.

Butzer, K. W.

1982 *Archaeology as Human Ecology*. Cambridge Univ. Press.

Clarke, David.

1973 Archaeology: the loss of innocence. *Antiquity* XLVII: 6-18.

Deetz, James.

1977 *In Small Things Forgotten*. Garden City: Doubleday.

Dunnell, R. C.

1978 Style and function: a fundamental dichotomy. A. A. 43: 192-202.

Godelier, Maurice.

- 1975 Toward Marxist Anthropology of religion. *Dialectical Anthropology*. 1 : 81-89.
- 後藤 明
- 1979 「海洋適応の考古学的研究に関して」『考古学研究ノート』東大考古学研究室 pp. 45-51.
- 1981 「アラスカ周辺における先史漁撈技術の考察」『考古学雑誌』67 : 56-94.
- 1982 「北方考古学における骨角製漁具の技術と機能をめぐる諸問題」『北海道考古学』18 : 23-34.
- 1983 「釣針」加藤・小林・藤本編『縄文文化の研究』第7巻 東京：雄山閣 pp. 198-209.
- (Goto, Akira)
- 1983 a Marine exploitation at South Point, Island of Hawaii: An aspect of adaptive diversity in Hawaiian prehistory. *Journal of Hawaiian Archaeology* 1.
- 1983 b Technology, ecology and symbolism of harpoons: with special reference to Polynesian case. XIth International Congress of Anthropological and Ethnological Sciences. Quebec and Vancouver. (in preparation)
- n. d. Marine exploitation and adaptive strategy of the Jomon Culture. *Asain Perspectives* (未定)
- Harris, Marvin
- 1968 *The Rite of Anthropological Theory*. New York: T. Y. Growell.
- 1977 *Cannibals and Kings: The Origin of Cultures*. New York: Random House.
- 1980 *Cultural Materialism*. New York: Vintage.
- 林 謙作
- 1977 「縄文時代の葬制 II」『考古学雑誌』63 : 233-246.
- 1980 「東日本縄文期墓制の変遷（予察）」『人類学雑誌』88 : 269-284.
- Hill, Robert.
- 1977 An anthropocentric perspective for Eastern United States Prehistory. *A. A.* 42 : 499-517.
- Hiller, B. et al.
- 1976 Space syntax. *Environment and Planning B*. 3 : 147-185.
- Hodder, Ian. (ed.)
- 1982a *Symbolic and Structural Archaeology*. London: Cambridge Univ. Press.
- 1982b Theoretical archaeology: a reactional riew. In Hodder ed. pp. 1-16.
- 1982c Sequences of structural change in Dutch Neolithic. In Hodder ed. pp. 162-177.
- 市川 金丸 他
- 1980 『青森県長七谷地貝塚』 青森県教育委員会
- Jochim, Michael.
- 1982 *Strategies for Survival*. Nnw York: Academic Press.
- Jones, Rhys
- 1967 From totemism to totemism in Palaeolithic art. *Mankind* 6:384-392.
- Keesing, Roger.
- 1974 Theories of culture. *A. R. A.* 3 : 73-97.
- King, T. F.
- 1978 Don't that beat the band? In *Social Archaeology* ed. by Redman. pp. 225-248. New York: Acadmic Press.
- Kirch, Patrick. V.
- 1980 The archaeological study of adaptation: theoretical and methodological issues. In *Advances in Archaeological Method and Theory*. ed. by Schiffer. Vol 3 : 101-156. New York: Academic Press.
- Kirch, P. V. and D. E. Yen.

後藤 明

- 1982 *Tikopia: the Prehistory and Ecology of a Polynesian Outlier*. B. P. Bishop Museum, Bulletin 238.
- Kohl, P. L.
1981 Materialist approaches in prehistory. *A. R. A.* 10 : 89-118.
- Leach, Edmund.
1973 Concluding address. In Renfrew. ed. pp. 761-771.
1976 *Culture and Communication*. London: Cambridge Univ. Press.
- Leone, Mark.
1982 Some opinions about recovering mind. *A. A.* 47-4 : 742-760.
- Miller, Daniel.
1980 Settlement and diversity in the Solomon Islands. *Man* 15 : 451-466.
- 水野 正好
1968 「縄文時代集落研究への基礎的操作」『古代文化』 21-3・4 : 1-21
- Moore, H. L.
1982 The interpretation of spatial patterning in settlement residues. In Hodder. ed. pp. 74-79.
- 西田 正規
1981 「縄文時代の人間植物関係」『国立民族博物館研究報告』 6 : 234-255.
- 丹羽 佑一
1978 「縄文時代中期における集落の空間構成と集団の諸関係」『史林』 61 : 274-311.
1982 「縄文時代の集団構造」『小林行雄先生古稀記念論文集』 pp. 41-74.
- Orlove, Benjamin S.
1980 Ecological anthropology. *A. R. A.* 9 : 235-273.
- Pearson, Michael Parker.
1982 Mortuary practices, society and ideology: an ethnoarchaeological study. In Hodder. ed. pp. 99-113.
- Renfrew, Colin. (ed.)
1973 *The Explanation of Culture Change: Models in Prehistory*. London: Duckworth.
- Rollin, L.
1929 *Les Iles Marquises*. Paris.
- Shanks, Michael and Christopher Tilley.
1982 Ideology, symbolic power and ritual communication: a reinterpretation of Neolithic mortuary practices. In Hodder. ed. pp. 129-161.
- Sinto, Yoshihiko H.
1979 The Marquesas. In *The Prehistory of Polynesia*. ed. by Jennings. pp. 110-134. Cambridge: Harvard Univ. Press.
- 谷井 彪
1979 「縄文土器の単位とその意味 上・下」『古代文化』 31 (2):39-51, 31 (3):30-49.
- Taylor, w. w.
1948 A Study of Archaeology. *American Anthropological Association Memoir* 69.
- Thomas, David. Hurst
1979 *Archaeology*. New York: Holt.
- Trigger, Bruce G.
1971 Archaeology and ecology. *World Archaeology* 2 : 321-336.

Symbolic Archaeology: A New Vista for the 1980's

Over the past 20 years, "new archaeology" based on a view of culture as an adaptive device, has contributed to the advancement of functional and evolutionary-ecological methods in the field. But at the beginning of the 1980's there seems to be a reaction to what is now perceived as an over-emphasis on the material, behavioral or functional aspects of culture. Several papers by Hodder and his students (Hodder 1982), and a recent paper by Leone (1982), argue that we should reevaluate the importance of the mental and symbolic aspects of man, and the historical context of culture. These archaeologists seem to share several assumptions: that all objects in a culture are equally important in regard to overall organization of that culture, and that all objects are shaped by a fundamentally mental structure (as well as primary use) which shapes social organization, myth, etc.. Some of them are more specifically concerned with structural analysis of archaeological materials and adopt its analytical criteria such as syntagmatic and paradigmatic relationships, binary opposition, etc.. Recently some Japanese archaeologists have also tried to reconstruct prehistoric social organization and cosmology on the basis of several kinds of materials such as mortuary practice, settlement form, pottery decoration, etc..

This symbolic approach in archaeology, or "symbolic archaeology", will contribute to the construction of a holistic perspective in the archaeological study of man and culture. However, there are certain problems in the use of this approach as a research methodology.

One problem is that the relationship between the symbolic/ideological aspect and the behavioral/ecological aspect of a culture is very debatable. Each archaeologist interested in this approach should clarify his position (eg. Cultural Materialism, Marxist Perspective, etc.)

Another problem is how to test the validity of a symbolic structure and how to inquire into actual social relationships which, according to some archaeologists, are often misrepresented by the symbolic aspects of material culture.

Third problem is how to introduce atemporal theory (eg. Levi-Strauss's structuralism) to archaeology which is essentially a diachronic discipline, without following "Pompeii premise" (Binford 1981).

Though "symbolic archaeology" has several problems, it is my conclusion that the recent proposal for use of symbolic approach presents a stimulating new vista for archaeologists who are seeking more comprehensive theory and method in the study of culture.